

研究題目

ふるさと「たのめの里」を知り、共に愛し、

「たのめの里」に貢献できる生徒の育成

～「アントレプレナー学習」と

地域貢献型生徒会による「夢プロジェクト」の実践～

目 次

- I はじめに
- II 研究の概要
- III 研究の経過・概要
- IV 研究の成果と課題

長野県塩尻市辰野町中学校組合立両小野中学校 校長 清沢 剛

**研究題目：ふるさと「たのめの里」を知り、共に愛し、「たのめの里」に貢献できる生徒の育成
～「アントレプレナー学習」と地域貢献型生徒会による「夢プロジェクト」の実践～**

I はじめに

本校は、以下1～3のような地域の特性、施設分離型小中一貫校としての特性、及びコミュニティ・スクールとしての経緯がある。

1 地域の特性

両小野地区は、古くは清少納言の「枕草子」や鎌倉時代に編纂された「夫木和歌抄」では「憑（たのめ）の里」とうたわれ、遡ること400余年前の天正19年11月2日に、北小野が筑摩藩に、小野が高遠藩へと村が2つに分けられるまで1つの里だった。「たのめの里」の由来は諸説あるが、信濃二宮として由緒ある「矢彦神社」「小野神社」の例大祭に由来されているとも言われる。以来、行政は異なっても1つの里として、教育や地域の活動を行いたいという地域の強い願いがある。

2 学校の概要

両小野中学校は、明治5年明正学校（下町）、頼母学校（大出、道玄）に端を発している。その後変遷を経て、昭和28年筑摩地村小野村中学校組合立両小野中学校となる。さらに、昭和34年塩尻市小野村中学校組合立両小野中学校となった。昭和36年に小野村が辰野町に合併したことを契機に、塩尻市辰野町中学校組合立両小野中学校となり現在に至っている。自然環境に恵まれ、古い伝統と歴史を継承し、地域の教育力に支えられている学校である。

また、平成23年度、地域主導による施設分離型の小中一貫「両小野学園」が設置された。そして翌24年度より、「ブリリアント活動」（地域人材の活用による文化活動）と「アントレプレナー学習」（起業家精神のもと、地域の課題を見いだす探究的な総合的な学習）をスタートさせ、本格的に地域学校協働体制による「ふるさと学習（キャリア教育も含む）」が始められた。この年度から、教育に対する地域の力強い支援を基盤に、小中一貫教育に保育園も加え保小中一貫教育体制も整えられた。

3 研究題目に向けた活動

平成29年度からは、保・小・中一貫教育の理念に基づく、学園全体のグランドデザインを作成し、両小野学園の願う生徒の姿『ふるさと「たのめの里」を知り、共に愛し、「たのめの里」に貢献できる子ども』を具現化するために、本校の中核活動である「アントレプレナー学習」を核として、中山間地・少人数の学校だからこそできる、「地域の課題に気づく学習」「地域貢献に関わる活動」を「やる気」・「挑戦」・「自信」の共通視点から評価しながら推進している。また平成29年度後半からアントレプレナー学習で見いだした地域の課題を、全校生徒で実践する「地域貢献型生徒会」を発足させ「夢プロジェクト」を推進している。

II 研究の概要

地域の一員として、「自分達に何ができるか」を追究する総合的な学習「アントレプレナー学習」と、アントレプレナー学習で見いだした課題を生徒自ら主体的に解決し、地域の願いを受けて地域貢献活動する「夢プロジェクト」の実践を通して、目指すべき生徒の姿『ふるさと「た

のめの里」を知り、共に愛し、「たのめの里」に貢献できる子ども』の具現化を行う。また、本校の特色ある活動である「アントレプレナー学習」と「夢プロジェクト」の実践を通して、地域の一員としての『所属感』や地域の方のためになっていると実感できる『自己有用感』や『自己肯定感』を育むことができると考える。

「自分たちに何ができるか」を問い続ける生徒たちの活動を支えるために、場の設定や地域との関係者との連携を図る。また、単年度の活動ではなく、生徒の意識の流れに沿った継続的な活動を行っていく。

Ⅲ 研究の経過・内容

1 アントレプレナー学習

(1) アントレプレナー学習とは

起業する者、自ら事業を興そうとする者がもつべき「挑戦する精神」「逆境にくじけない気持ち」、即ちアントレナーシップ（起業家精神）になぞらえて命名された総合学習で、地域の課題を見だし、その課題を地域の一員として、自分自身の課題と捉え、「自分達に何ができるか」を問う探究的な総合学習である。全校縦割のグループを編成し、地域を題材にしながら学びを深めていく。

(2) アントレプレナー学習の活動の進め方

- ①前年度末に、全校から「地域の課題は何か」を、個人個人全員が考え、小人数の学校の強みを生かし、共通な課題をまとめていく集会を開く。次年度のアントレプレナー学習に向けての意見交換会とし、このような意見交換を通して、全校縦割によるグループ編成を行う。平成31年度（令和元年度）は5グループ、令和2年度は4グループとなった。

平成31年度	○空き家対策・地域美化	○地域行事参画	○霧訪山
	○地域PR・キャラクター	○地域食材	
令和2年度	○地域対策（地域美化・空き家）	○地域PR（キャラクター・地域行事）	
	○地域の文化（両小野の衣食住）	○地域の自然（霧訪山、紅葉山など）	

- ②グループごとに活動を進める。初めに、3年生のリーダーを中心に、グループごとの活動内容の決めだしを行う。その後、具体的な活動が進む。さらに小グループでの活動の場合もある。



- ③発表会

- ④意見交換会

(3) グループ活動の実践

①「空き家対策・地域美化」グループ

生徒は、両小野地区に空き家が多いことに課題をもち、「自分達に何ができるか」を考える活動に取り組んだ。まずは、地域にどれだけ空き家があるのかを調べるために、振興会の方と連絡を取りその実態を把握した。多くの空き家があることを確認し、所有者の願いを聴いたり、その活用を考えたりする中で、空き家の掃除を考えた。振興会の方に、



空き家の片付けを望んでいる方がいないかを確認し作業に取り組んだ。(※左記写真) 空き家を掃除し、きれいになった空き家を、振興会のホームページに掲載したところすぐに買い手が見ついたことを聞き、生徒は、「地域の役に立てた」という達成感と、地域の一員としての所属感を感じることができた。

②「霧訪山」グループ

地域のこの山に登山客の方が何を必要としているかを考え、立て看板を作成し、登山道に道しるべを立てたり、ベンチを作成し休憩できる場所を作成したりした。また、登山者数を把握するために、地域の方の協力を得て、カウンターを設置することなどにも取り組んだ。さらに、霧訪山の『ホームページ』を作成し、この山の魅力を伝える活動にも取り組んだ。



(4) 考察

生徒たちは与えられた課題ではなく、自分達が地域の一員として地域にどんな課題があるか、そしてその課題をこの地域に住む自分達自身の課題と捉え、その課題に対して自分達に何が出来か考えて活動をしてきた。与えられた課題でないため、やらされ感のない『自ら自主的に、楽しんで活動する姿』がそこにはある。

また、地域の方の支援を受けながら、地域の一員として、地域の人やものと関わりながら活動を進めている。地域の一員としての所属感を感じる場面が多く、地域の方とともに活動が進むにつれて形を成していくことが有用感となり、活動が次へと展開されていっている。

2 両小野PRキャラクター「うとう」

ここで話題とする「両小野 PR キャラクターうとう」は、平成 29 年度から、平成 31 年度（令和元年度）のアントレプレナー学習の活動の中で生まれたキャラクターである。

(1) Nさんの原画をもとに全校で選定 キャラクター「うとう」の誕生

右の写真は、Nさんが、1年生の時にアントレプレナー学習の地域PR・キャラクターグループの活動で書いた「うとう」の原画である。Nさんは、小学校の地域学習の中で行った地域の民話「うとう峠」の劇が印象に残っており、このお話に出てくる「うとう」という鳥（ウミスズメ科の海鳥）をもとに地域を活性化するキャラクターを考え、原画を作成した。自分の命に代えても子どもを守ろうとする人と、善知鳥（うとう）の話を綴ったこの民話が彼女の中に強く残ったことがこのキャラクターを生む原動力である。



アントレプレナー学習の活動の紹介の中で、このキャラクターを運営協議会、両小野振興会で紹介したところ、このキャラクターが大変好評だった。そのため、このキャラクターを地域活性にさらに役立てられないかと中学校の大きなプロジェクトへと発展していった。

Nさんのキャラクターを大切にしながら、地元出身のデザイナーさんに依頼し、デザインを練り上げていった。Nさんがこのキャラクターを地域のキャラクターにしようとした原点にあるこの「うとう峠」の話を



大切に、「子を思い、大切に作る鳥」（善知鳥峠のこの「善を知る鳥」）のイメージのもと、雛がポシェットに入ったデザインや、アントレプレナー学習の「空き家対策」に取り組む意を含めた屋根をかぶったデザインなど、4つのデザインが提案された。

提案されたデザインをもとに、キャラクターグループと空き家対策グループが話し合いを行い、さらに、空き家対策グループとも検討し、デザイナーさんと電話連絡をし、デザインを練り上げた。デザイナーさんから再提案をしていただき、このデザインの中からよいものを全校で投票し、投票の結果から現在の「うとう」デザインができあがった。

(2) キャラクター化 「うとう」の保護・グッズ作成

できあがったキャラクターを用いて、地域のPRをするために、グッズ化を考えた。

グッズ化を考える上で、中学校で練り上げたキャラクターであり、知的財産として保護するため、文化庁に『著作権登録』の申請を行った。著作権申請と同時に、グッズ作成の構想を練っていき、キャラクターグループではこの活用を考えた。最初に作成したグッズは、ミニタオル、クリアファイル、木製のキーホルダーである。



(3) 地域行事で「うとう」のグッズを活用 H29~H31

「うとう」を地域の方にもっと知ってほしいという願いのもと、初めはそのグッズの中のクリアファイルを地域の保育園、小学校の園児、児童の皆さんに配布した。その後、地域の行事等に積極的に参画する中で、アントレプレナー学習の他のグループとも連携を図りながら、グッズ販売などを通して、地域での「うとう」の認知度も上がっていき、このキャラクターが地域に浸透していった。地域の新聞社等にも多くとりあげられるようになるとさらに、「うとう」の認知度、両小野地区の認知度が上がっていった。



(4) 地域の声からの「うとう着ぐるみ」制作 両小野PRキャラクター「うとう」

活動の広がりとともにうとうの認知度が上がり、着ぐるみを作ってほしいという声が、地域からも聞こえるようになり、ゆるキャラとしての両小野PRキャラクター「うとう」を制作した。令和元年度、県の元気づくり支援金の補助と、塩尻市の生きる力の交付金、グッズ販売のお金などをもとに、ゆるキャラ「うとう」を作成し、地域PR活動をより活発に行った。(後述の夢プロジェクトの活動と関わり、多くの活動に参加)

(5) 地域行事に「うとう」とともに参加

- ①塩尻市教育長表敬訪問、辰野町教育長表敬訪
- ②NBS 祭り参加
- ③小学校訪問
- ④北小野保育園運動会参加 小野保育園運動会参加
- ⑤地域の活動に参加（北小野運動会、小野綱引き大会）



(6) ゆるキャラグランプリへの参加

①令和元年度

8月から取り組んできた「2019 ゆるキャラグランプリしあわせ信州 in NAGANO」の決選投票に11/2・11/3と両小野PRキャラクターの「うとう」が参加した。全ご当地キャラクター427体の内、31位（得票10111PT）となった。中学生31名の有志を中心に、うとうのキャラクターグッズの販売を行い、2日間のグッズ売り上げは、7万7255円だった。生徒達が生き生きと活動する姿がそこには確かにあったように感じる。

この「ゆるキャラグランプリ」のインターネットの投票期間に、県内でも北信地区、東信地区を中心に台風19号による大きな被害が出た。地域PRを意図に開始したこの活動であったが、ゆるキャラグランプリの趣旨（3・11の東日本大震災で、心を痛めている日本をゆるキャラの力で少しでも元気にしよう！）を酌み、「自分達に何が出来るか」を考え、生徒会を中心とした生徒達は、今回の台風19号で被災された地域への寄付をしようと考えた。11月16日、日本赤十字長野県支部に日本赤十字社塩尻支部長である小口利幸塩尻市長を通して義援金として、この売り上げ全額を寄付した。

②令和2年度

前年に続けてゆるキャラグランプリへのエントリーを生徒会で決定。地域へ投票の呼び掛けをチラシやポスターで行った。また、塩尻市内の中学校へ生徒会を通して、投票依頼を行った。また、ゆるキャラグランプリに出ているキャラクターとしての価値が加わることで、ゆるキャラ「うとう」が参加依頼を受ける催しは、活動の幅が広がっている。交通安全や国勢調査のPR、小学校や保育園の運動会などでは、生徒の活動だけでなく、地域の方が代わりに活動をしてくださることも出てきている。

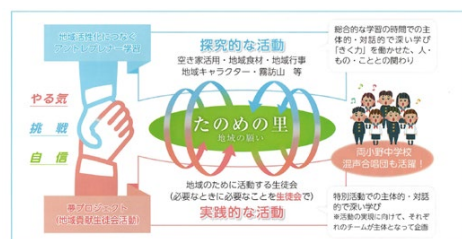
(7) 考察

うとうは、学習の中で生まれてきたキャラクターであるが、生徒たちの活動や地域の活動のよりどころになっている。生徒のアイデアや活動を地域の方がおもしろがったり発展させようと力を貸してくれたりし、さらにキャラクターを通して生徒が地域に関わっていく活動になっている。キャラクター「うとう」は、これからの活動の中でさらなる発展の可能性を秘めていると考えている。

3 地域貢献型生徒会による『夢プロジェクト』 平成29年度後半から実践

(1) 地域貢献型生徒会による『夢プロジェクト』とは

アントレプレナー学習が、地域の課題を自分の課題として「自分に何が出来るか」を問う探究的な総合的な学習とすると、『夢プロジェクト』は、アントレプレナー学習で見いだされた課題を全校生徒が主体的に実践し解決したり、地域の願いをうけて実現したりする地域貢献活動である。



右図のように、探究的な活動である「アントレプレナー学習」と実践的な活動である「夢プロジェクト」を絡め、地域のためにできることを主体的に実践する活動となっている。

(2) 夢プロジェクトの実践 令和元年度から令和2年度

①油屋清掃

初期中山道（三州街道）にある、県宝「油屋」の清掃。休みの日の自主的な参加にもかかわらず、全体の2/3の生徒がこの活動に参加した。

②記念樹の植樹

前年に引き続き、この息の長いプロジェクトを遂行。前年に植えた記念樹の周りの下草刈りも行った。また、7月には、北小野財産区の方のお力をお借りして、管理維持のため、再度下草刈りを行った。

③小野宿市

酒蔵コンサートでの吹奏楽部の演奏協力、蕎麦のふるまいのお手伝い、うとうグッズの販売、小野酒造さんの酒粕を使ったクッキーのふるまい等、地域の方と町おこし活動であるこの「小野宿市」を盛り上げた。また、多くの人に集まって頂くことが課題と考え、塩尻駅で小野宿市のチラシの入ったティッシュ配りを生徒会主導で自主的に動く姿もあった。

④たのめの里教育の日

～地域の大人が中学1日入学～

中学に登校する中学生に交じって、地域の大人の姿が目立つ。「たのめの里教育の日」の風景だ。地域の皆さんが緊張気味に校門をくぐる。午前中は教室で数学と理科の勉強。

教頭先生の「謎かけ数学」は実に楽しい。理科の実験は、顕微鏡をのぞき、不思議な細胞学習でミクロの世界を体験した。生徒と共に受けた、民話・短歌・手話・御柱講座は地域講師が担当した。給食を生徒と共に済ませた後は、生徒を前に、「わが青春時代」を語る。中学生時代の思い出や地域の様子を回想する大人の語りに、生徒が熱心に耳を傾けていた。教室の掃除を終了し、校長先生より修了証書を頂いた。学校がこれほど身近に感じたことはない最高の1日であった。（8月北小野公民館報より）

⑤土真ん中ウォーク

塩尻市体育協会主宰のこの活動に、アントレプレナー学習の全グループが活動。地域食材グループは、酒粕を使ったクッキーのふるまいを行った。地域参画グループは、両小野のクイズを作り、スタンプラリーを行った。ゆるキャラの「うとう」も登場し、参加者の応援を行い大好評だった。

⑥辰野町中学生議会

全校生徒集会で意見を出し合い、集約した内容を代表生徒が辰野町中学生議会で発言。地域福祉の状況に対して、道路の道幅や歩道整備、街灯等での安全対策についてなどの要望を行った。

⑦災害募金活動

全校集会でうとうを活用した活動について話し合った。令和2年度はコロナ禍のために地域行事、学校行事の多くが中止となったが、話し合いで出された意見の中から生徒たちが選んだ活動は募金活動だった。感染予防に努めながら、ゆるキャラ「うとう」を使って塩尻駅前前で3年生が募金の呼び掛けを行った。

(3) 考察

コミュニティ・スクールの活動で、地域から学校への支援は基盤となる活動であることは、言うまでもないが、「夢プロジェクト」の活動によって、本校は「学校から地域への活動」として実践を行った。このような地域学校協働活動（学社連携の活動）が、高く評価され、平成 30 年 12 月 3 日には『文部科学大臣表彰』を受けた。

実践⑥では、地域の福祉や道路状況等について生徒が議会へ意見している。自分がよりよく暮らすためだけでなく、地域で暮らす方たちの目線に立っての発言である。また、実践⑦のように、生徒たちは活動を企画し、実践する力をつけていることも伺える。自分たちで企画・実践した地域での活動が主体的に進められ自信をつけることで、また次の活動のエネルギーとなっている。



右の写真は、地域の広報誌の表紙を飾った写真である。油屋での「蕎麦の振る舞い」で給仕をしたときの一瞬を切り取ったこの写真であるが、女子生徒の表情には、自ら主体的に動き生き生きと活動する姿、そして、自分が地域のために役立っているという「自己有用感」がにじみ出ている。

IV 研究の成果と課題

令和元年度、全校アンケートを実施し、「アントレプレナー学習」と「夢プロジェクト」の活動のまとめを行った。（最後の質問を抜粋）

【質問】あなたは、アントレプレナー学習や夢プロジェクトを通して何を学びましたか。

【3年生のアンケート結果】

- ・人と関わることの必要性やどんなことにも挑戦することの大切さです。
- ・人との関わりや意見をもつ事の大切さを学びました。
- ・目的があって活動しているし、何も考えずにやっても意味がないので、自分なりに考えて、それは仲間がいるからできることだと思いながら活動しました。
- ・仲間と協力することで、得るものが多いと思いました。
- ・みんなが話し合いに参加すると新しいアイデアがたくさん出てくるということです。
- ・学年の壁関係なく、協力しながら活動することの大切さです。
- ・自分のやるべき仕事を貫くという意識をもつことの大切さです。
- ・計画的にものごとを考える大切さです。
- ・仲間が困っているときに、自分が何をすべきか考えることです。

生徒の自己評価から、以下のような成果が挙げられる。

- 「地域貢献に自分の意思で関わることの大切さ」「自分から関わりをもって、自主的に取り組むことの大切さ」「考えて行動することの大切さ」「些細なことでも意見を言うことの大切さ」「計画的にものごとを考える大切さ」など、主体的な姿勢を高めることができた人がいた。
- 「仲間が困っているときに自分が何をすべきか考えることの大切さ」「感謝することの大切さ」「学年の壁関係なく協力しながら活動することの大切さ」など、人を思いやり感謝したりする心を高めることができた人がいた。
- 「どんなことにも挑戦することの大切さ」「自分のやるべき仕事を貫くことの大切さ」など、強い心をもつことができた人がいた。

本校の特色ある活動である「アントレプレナー学習」と「夢プロジェクト」を通して生徒は自己の高まりを感じており、本研究主題『ふるさと「たのめの里」を知り、共に愛し、「たのめの里」に貢献できる生徒』に近付いていると考える。また、地域の一員として自分たちに何ができるかを問い続ける生徒たちを支えているのは、ふるさと「たのめの里」である。ふるさとに積極的に関わることと同時にふるさとに支えられている自分を感じられるよう、コミュニティ・スクールとして、地域とともにある学校を今後もさらに目指していきたい。また、これらの学びを各教科の学習でも感じられるよう生かしていきたい。